



# 筑紫女学園大学リポジト

## 研究所展望 ～これからの研究所～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/318">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/318</a>

## 研究所展望

### ～これからの研究所～

#### 出席者

森田真也（日本語・日本文学科准教授）

大森幹之（英語メディア学科講師）

緒方知美（アジア文化学科講師）

西原尚之（人間福祉学科教授）

#### 聞き手・司会

大津忠彦（研究所長、アジア文化学科教授）

宇野智行（研究主任、日本語・日本文学科准教授）

### 研究所のイメージ

**大津**：本日はお忙しい中、ご参集頂きありがとうございます。先日は、これまで研究所運営に深く関わってこられた先生方に来学していただき、研究所がどういう経緯で生まれ今日に至っているのかという、過去の歩みをお話していただきました。本日は、人間文化研究所が創立 20 周年を迎え、これからどうあるべきか、こうあって欲しいなど、学内の比較的若い先生方に、大いに議論していただきたいと思います。研究所におきましても、昨年来から少しずつ具体的な部分について考え進めてまいりましたが、まずはお手元の資料をご覧くださいながら宇野先生よりご説明をお願い致します。

**宇野**：お配りした資料には、研究所のこれまでの経緯と現状を纏めさせて頂きました。4月の座談会で、研究所 OB の先生方にお話し頂いてはっきりした事は、創立当初には、明確な研究所の目的意識があったということでした。もちろん当時二十年前には私もここにはおりませんし、お話を聞かせて頂いて想像するだけですが、大学の教学課題に沿った特色ある研究、特に様々な分野の人材を結集して筑女らしい共同研究を推進させることが、本来の目的だったように思います。研究所が出来たのは、大学開学直後ですし、その時は、日本語・日本文学科と英語学科と短期大学しかありませんでした。短大に加えて大学が二学科でスタートし、共同研究のテーマとして、建学の精神を持ちながら、「仏教に関わる研究」「言語に関わる研究」などという研究テーマが掲げられておりました。このようなテーマの元に、学際的な研究を共同で深めようという意図が強く感じられた次第です。しかしながら、私も含め、創立当初を知らない先生方にとっては、研究所のイメージも漠然としていると思います。その先生方にとって、この研究所はどんなイメージなのか、またどのような形で存在したらいいのか。先生方の忌憚のないご意見をお聞かせください。

西原：本学に就任して、研究所についてまず思ったことは、漠然と研究する所だろうなということです。しかし、実際、『年報』に論文を掲載するとか、今回このような座談会の機会があるとか、多種多様なことがあるんだな、という程度のイメージですね。また、仏教関連の何か研究をしているんだろうと。

宇野：私も何もわからないまま就任して、勤め始めて、研究所という何かが有るんだというくらいの認識でした。また研究所は、仏教だけの研究というわけではないと思います。本学には、仏教学科みたいなものはありませんでしたが、一応宗門校ということで、短大だけの時代から土台として仏教があったのでしょうか。また、大学開学の時に、「国際」「グローバル」という概念が求められて「国際文化研究所」という名前がつけられたように聞いています。このような経緯で「仏教」「言語」というテーマが出て来たようです。しかし、1999年にアジア文化学科と人間福祉学科が、2002年に発達臨床心理学科が出来まして、教学課題自体が多様化してきました。研究所の研究者も、当時は在籍教員全員ということになっていましたから、「国際文化研究所」のままでいいのか、という問題にぶつかり、研究所自体の改革をしようという中で、前所長の高石先生が中心になって、名前を変えることから始められました。少しずつですけども、研究所を「研究する所」にしようという意図を、現在、大津先生と私が受け継いでいます。先生方も研究所に対するイメージは、ほぼないか、あるいは場所があるだけだ、という感覚ですよ。

大森：申し訳ないですけど、その通りですね。

宇野：例えば、研究所の『年報』の前身は『論叢』だったのですが、当時は「表現と言語」「過去から現在へ」「浄土真宗とは何か」等、大きなテーマがついていました。創刊当初は、このようなテーマの元に共同研究が模索されていたようですが、『論叢』第6号以降にはテーマがありません。本学には、専門分野を考えると共同研究のために共同できる先生が少ないので難しいようにも思います。創刊当初の『論叢』では大きなテーマを掲げておきながら、そのテーマに関わる論文が巻頭に4本くらい掲載され、その他はテーマとは関係のない論文ばかりです。しかし、テーマに沿った研究を研究所が主導していたことは確かです。このように本来は、研究者間の共同研究を推進しようという組織のはずですが、現在はなかなかこのような形での取り組みにはなっていません。純文学系で集まって何かをやろうというのでもよければ、新学部開設に合わせ、人間科学系の大きなテーマを掲げてもいいのではと思います。今の『年報』は、大学『紀要』の第二紀要みたいになって、『紀要』と全く変わらない雑誌を作るだけなんて、もったいない気がします。

森田：共同研究というのを立ちあげて、それで研究費をもらった人は、論文を書くという方法の一つあるでしょうし、外部から客員研究者を呼んできて基調講演をしていただき、それを活字化してコメントを付けるという方法もあります。つまり、工夫をすれば、一冊全部は無理だとしても、巻頭論文で特集というのを組むことは可能な範囲だと思います。

宇野：創立当初は、まさにそのようなことが意識されていたようです。次年度のテーマという形で、研究所が主導し、研究を促すという形です。また、共同研究という形でテーマに沿ったシンポジウムが学内で開催されて、そのアウトプットも大いに意識されていたようです。

森田：そのような、いろんな活動が研究成果として活字化して、アウトプットするという

方向に全てがリンクしていけば良かったんでしょうけれど、忙しくなってそれができなくなったんでしょうね。

**宇野**：一番の原因は、教員が忙しくなり過ぎているというところにあると思います。物理的には、教員の研究時間が取れず、アウトプットするまでにならなかったとも考えられます。また、研究所の歴史の中で、当初の目的が少しずつれて、外部向けの宣伝媒体として、外部講師による公開講演会をやって、それをテープ起こしするだけという状況になった時期もあります。

**西原**：ところで、大学『紀要』は今、インターネットで全部見られるようになっていますが、研究所『年報』はどうなっているのでしょうか？ここまで作るのであれば、外向けに出さなくてははいけませんし、出すとなれば先方が入用でないとならダメなのです。掲載された論文が雑多に並んでいるだけでは意味がないのではないのでしょうか。仏教関係なら仏教関係で、この大学の出すこれはこういうものだから・・・という認知が広まれば、それはそれなりに存在価値があると思うんですよね。ここは、第二紀要の役目として機能はしているのだろうけれども、きちんとした研究所のカラーを前に出して、発行するかっていうところの別れ目じゃないのでしょうか。

**宇野**：研究所としてはテーマをうち出していきたいのです。こんな風にしたい、特集みたいなものを考えた方がいいのでは等、考えている途中です。しかし今のところ、特集を組むにしても、投稿者全員の論文が掲載される仕組みになっていて、強い方向性を出せない状況にあります。

**緒方**：方向性の事ですけども、『紀要』というのはそれぞれの専門研究があるわけで、それで出せばいいわけですよ。筑女という大学組織の枠にはめられている多様な研究者が、相互に、あるいは大学外からのニーズに応える形で、何か新しいものを生み出すための組み換えの場として役立てば一番理想的だと思うんです。あとは教育です。博物館学という教育を行っている私は、その関係の先生を外部研究機関から呼んで来て、大学における博物館学について、教育に関わる研究のやりとりを行っています。それをアウトプットしたりして意見交換の場にするということもあるのです。個人の研究の場、教育部分でのテーマ作りの場、地域からのニーズを受けとめる場として、それらを統括し、繋ぐ研究所であって欲しいと思います。

**宇野**：僕は、教育というのは、少し研究所とはズレていると思います。もちろん、おっしゃりたい事はよくわかります。研究所が学外者向けの公開講演会を企画していた時期がありまして、それが研究所の当初の目的とずれた状態になったので、これを移管して生涯学習センターが出来たんです。研究所が人間文化研究所に名前を変えた時ですね。学外の地域ニーズに応えた生涯学習センターは、そのサービスを担うわけで、研究活動そのものとは違うと思うのです。

**緒方**：よくわかりました。部署はあるけれど、中身を作っている人が同じ人で、その両方をしないといけない状態になっているということですね。

**大森**：研究と教育はもちろん分離できないとは思いますが、研究は最先端ですよ。教育はそれを受けて、つまり研究の結果が出た後でそれを活かしていく形ですね。だから研究はもっとトンガった方が良いでしょう。

**森田**：研究所のイメージが違うような気がします。緒方先生が言われたのは、いろんな部署を統括するという意味で、柔軟に動けるし、規模も大きいし、人もいるというような研究所をイメージされていると思うのですが。

**緒方**：そう、出来たらなあと思って。

**森田**：宇野先生や大森先生が言われる、研究に特化した研究所、研究者が研究する研究所のイメージと違うと思うんですよ。緒方先生が言われている研究所も確かにすばらしいとは思いますが、規模的に難しい気がします。

**宇野**：それは多分「研究所」というより「〇〇統括センター」みたいな感じでしょうね。

**緒方**：私がこんな風に思ってしまったのは、今現在、統括する部門がないからだだと思います。研究所での研究をさせてもらおうとして、また別に生涯学習の仕事もやってきます。だから全く違う２つの事に時間を割くわけで、研究の時間が無くなる一方です。だから、研究所で研究しているのを上手く吸い上げてそれを生涯学習という形でアウトプットするような組織が出来ていればいいなと思っていて、どこかが統括して、地域貢献に繋げてくれるような流れが出来たらいいなあと、理想をお話ししてみました。

**大津**：今緒方先生がおっしゃったようなことは、もしかしたら、全教員が抱えているのではないのでしょうか。

**緒方**：忙しすぎて研究が出来ないということですか。

**大津**：ただその中でも地域連携の話がありましたが、生涯教育とは何かというアプローチをすれば、研究に特化した研究テーマと成り得ると思うんですよ。そこは、それぞれの専門性というものにどのくらいこだわるかにかかってくると思うんですよ。それぞれ専門領域を持っていらっしゃる訳で、大学の経営の中でいろんなことをやらなくてはいけない、限られた人員の中でやらないといけない。それをどう融通するかというところで、今のような忙しさを呈しているのではないかと思うのですけれども。でもその中で、研究というところを自分で守れるのか。その辺で発信出来るのか、というところではないでしょうか。当たり前のことを言ってしまいましたが。

**宇野**：結局、今のところ研究所が先生方の研究時間を確保してあげるということは出来ない。でも、研究所としては、みんな研究してほしい、研究するところだよ、というメッセージは出したいですけどね。

**緒方**：メッセージを出すという事は、縛りを強くするというか。

**宇野**：ある程度こちらから、『年報』の特集のアナウンスを毎年行っていくなどやり方はあるかなと思います。

**大津**：やはり縛るからには、何か旨みもあって欲しいですよ。

## 特別研究助成

**西原**：研究所の旨みと言えば、研究のための研究資金を出すとか、あとグレードを高くしてあげる、この二つしかないですよ、多分。そのためにどうするかということを考えるしかない。

大森：しかし、大学『紀要』、研究所『年報』等、学内で発刊しているものは、学外の論文掲載と比べ、レベルが違いすぎます。

西原：でも、大学『紀要』はインターネットを通じて見ることはできますが、研究所『年報』は見られない。これをインターネットに上げて、上げるためにはそれなりのものを書かなきゃいけないということになります。そのためのサポートというのを、ここは出来るわけですよ。そんなことですよ。

宇野：実際、PDFで納品はしてもらっています。だから、インターネットにアップするというのもすぐ可能です。しかし、大学『紀要』のように図書館課の事務職員がいれば、すぐできるのですが、研究所は誰もいないのが現状です。

森田：科研費を貰っている人が、この『年報』に研究ノートのものとして投稿して、次にもう一回申請する時に、業績として出すというそういう使い方も出来るでしょうか。

宇野：そうですね。そういう使い方も出来ると思います。

緒方：あともう一つ、学内研究費と、学外の科研費は全然リンクしてないじゃないですか。例えば、学内研究費を貰って研究して、次に学外の科研費に通った人は、次は申請を出さないという縛りを付けるような・・・学外と学内の2つを同時に貰わないようなシステムにはなってない。研究機関として研究資金を出すのであれば、ある程度評価に耐えるような研究をしてくださいますか、学内研究費を出す時に学外での評価を加えるとか、いろいろな方法はあるのではないのでしょうか。

森田：科研費を貰ったら、学内研究費（特別研究助成費）は断らなきゃいけないんじゃないですか？

緒方：本当？いや、それはないんじゃないですか。

大津：いや断っていますよ。自主的に断わっている。

緒方：でも、それは決まりじゃないですよ。

宇野：決まりじゃないです。言っておきますけど、特別研究助成というのは、研究所の事業じゃないですからね。

緒方：あ、そうかそうか。

宇野：そこが一つ問題なんです。研究所がお金を旨みとして出そうとしても、一円もないんです。

森田：研究資金の管理とアウトプットが全部一緒になってくれないと。

緒方：なってないんですよ。じゃあ縛るのは無理じゃないですか。

宇野：だから今は、教員それぞれが自由に投稿した論文の編集局みたいになってます。

緒方：かわいそうですね。

宇野：夏休みは、『年報』の編集で埋まってしまいます。目次などの全体校正とか、掲載順やレイアウトを考えたり。

森田：本来なら、研究所が主体となって、研究計画書に対してきちんと審査をして、研究のためのお金をあげて、アウトプットをきちんと載せて、というのがうまくサイクルに乗ってれば、いいんですよ。

宇野：そうですね。そのサイクルが今のところまるっきり出来ていない。

森田：ただ、お金もらう人はもらいっぱなしで、アウトプットはよそでやってくれている

んだらうとは思いますが、大学全体の知的財産としては形に見えてこない。

**大津：**一応、ここで受けたものについては、その成果を発表しなければならないというのは、決まってはいるわけですが、それが十分に果たされているとは言えない。また前の段階の、誰が助成金を受けるかということについての審査が非常に緩い。悪い言葉を使えば、お手盛りの決まってしまうわけですよね、現状としては。今年度にしたって、申請額が100%そのまま認められている。考えたら異常な事態になっている。これだけの予算があると、申請額がこれだけだったと。その中に収めれば、もうほとんど、そのまま認められるという事は、どう考えたっておかしい。研究についてそのように甘いわけですよね。入口が甘いわけですから、出口も甘くなってしまって当然となっているんじゃないかなあとと思います。

**大森：**よく外部資金であるのは、先払いじゃなくて、研究のアウトプットが一年間終わった後に、では出しますよというのがよく外部資金であるわけですけれども。論文とか、どういう結果を出しましたというのを元にしてお金を出すという。例えばそういう縛りを付けるとすれば、来年の研究は個人研究費から少しずつ払って下さいねとか、ローン払いにするとか。そういう縛りをつけると、少しドラスティックかもしれませんが。でも外部資金はだいたいそんな感じじゃないかなあとと思います。

**森田：**あとは、審査の状況を開示しているかどうかという問題。申請書をPDF化して、誰でもがというのは難しいかもしれませんが、学内であればこの人こういう研究をしてお金をもらっているということが誰もがわかる状況にして、その研究結果を見えるようにすること。それがすべて曖昧になって済まされているから、どう言う風に誰がお金をもらって、どう言う風にアウトプットされているかが見えないんですよね。それはPDF化して学内で閲覧することはできるんじゃないですか。

**西原：**特別研究助成費のことは教授会とかでは出て来ないんですか。誰がいくらとか。

**宇野：**教授会資料としては出て来ないですよ。

**緒方：**教員談話室に掲示してあるだけです。

**森田：**だから、特別研究助成を貰った人が、義務を果たしているかどうかは、今の段階では全くわからない。お金もらって海外調査してきて終了という方もいらっしゃいます。

**西原：**いいですね。

**緒方：**いや、いいですけど、だんだん良心が痛むのでは？

**大津：**本学『紀要』に発表しなければならないということは学園規程の例規集に謳ってあるわけですよ。

**大森：**本学『紀要』に書かないとダメなんですか。

**宇野：**本学『紀要』、あるいは研究所『年報』に書くことになっているはずですよ。

**大津：**2年以内だったのではないのでしょうか。

**森田：**外部は当たり前だけど、もちろん大学にも落としてもらいたい。もし規程を破った人がいたら、しばらくの間、たとえば向こう5年くらいは申請を受け付けませんかとかはないのでしょうか。時間がかかる研究もあるとは思いますが、最低5年くらいはダメよとペナルティを設けるべきではないのでしょうか。

**大津：**公的な補助金は、公開（発表）の義務が何年以内になさなければならないことに

なっています。常識的には、もらった所に第一報をする、それが普通ですよ。

**森田**：科研費も研究成果報告についてはPDF化され、電子登録になってます。

**緒方**：科研費にあわせてもいいわけですよ。その仕組みについてはですね。あと、学内でお金をもらっていることが伝わるように、合同発表会をやってもらう。

**西原**：前の大学ではやっていましたよ。研究所からもらったお金で研究をしたら、次の年の3月に20分くらい成果報告会を。

**緒方**：それはするべきじゃないですか。もちろん、学問的な評価は学内ではできませんけれども、可視化という意味では。面倒くさいですけど。

**宇野**：その前に、特別研究助成のすべてを研究所が配分しなければならないと思います。研究所がその研究資金を出すという方向に移行していかないと、研究所から特別研究助成の成果発表会をお願いすることも出来ないでしょう。

**緒方**：資料には、以前研究所が持っていたものを、大学に移管したのが2000年と書いてありますが、その経緯はどういうことだったのでしょうか。

**宇野**：その経緯はですね。アジア文化学科と人間福祉学科の学科設置時に、文科省から共同研究のための研究資金、要するに競争的研究資金の確保、ということ言われたらしいのです。その当時3年間だけ研究所が出していた研究助成金の額は個人研究で20万円、共同研究で50万円、採択も2~3件だったようです。それで文科省から指導があり、その共同研究の研究資金を拡大してみたものの、研究所には事務職員もいなくて、その業務を大学事務局に移管しようという話になったんです。

**緒方**：それで、競争的研究資金と言えるのでしょうか。その経緯を考えたら、事務がないというだけの問題なのでしょうか。事務と研究所の運営委員がリンクして、会議を通して事務を行えば、それで問題ないのではないのでしょうか。

**宇野**：研究所で審査しますと言って、事務的な手続きは今と同じようにやっていただくということは、僕は出来ると思うんです。審査してアウトプットしてというのは、研究所側が自分の首を絞めることになるだろうけど、我々研究者が自分を律していくという形を取らないと無理ですね。

**緒方**：事務員は増えないでしょうからね。私たまたま女子教育研究会の報告をしたんですけども、京都橘大学の女性歴史文化研究所というところに行ったら、橘大学は8学科もあるんですよ、とても細分化されていて。センターが4つ、プラス研究所があって全部で5つ部署があります。それに全員教員がどこかに充てられているようで、全部を統括するリエゾンオフィスという、私の理想のオフィスが研究者を縛っていて、学内申請も学外申請もそのオフィスがやり取りをしている。研究所の運営委員会を月一回くらいやっていて、アウトプットの為の公開講座をリエゾンオフィスの事務員と研究所の職員が考えて、中身は教員がやるけれど、ポスターを作ったりDMを送ったりは事務員がやる。事務員は7人いてうち2人が専任。大学としては、同じくらいの規模ですよ。

**宇野**：普通の総合大学というのは、学部ごとに研究所を持っています。それは、所属する教員の教学課題が学部によって違うから。例えば、文学部だったら文学に関する研究所があるでしょうし、経済学部だったら経済に関する研究所があるでしょう。そういう規模だと、色んな研究所を統括する組織はあるでしょう。ところが、本学は学部が二つになって



も、研究所を二つ作るとか、それを統括する部署を作るとか言う形にはならないですね。そこは難しいから、この制約の中でいったい何が出来るんだろうかという問題になってきます。

**大森**：権限だけは受け取って、事務作業は庶務課に任すというのはどうですか。

**宇野**：それがベストです。今は、権限ゼロでいっぱい仕事している感じです。

**西原**：特別研究助成の審査というのは、具体的には誰がどんな風にやっているのですか？

**宇野**：審査委員会というのがあります。学科長などの立場の先生方が集まって審査しています。だから、研究所はまるきり審査には関わらない。

**大津**：助成金審査委員会というのがあります。そこで審査して、そこで決定したものが、教授会で報告事項となる。

**宇野**：先生方は見た事があると思いますが、特別研究助成費の申請書は、研究の内容や計画を記す書類としてはA4が一枚です。

**緒方**：簡単です。私も書いて助成をもらいましたから。

**森田**：ちゃんと研究計画書を出してもらって、通ったものについては公開する、ということはやっていかないと、A4一枚でお金もらいましたというのでは。

**大津**：最高150万円です。

**森田**：審査のシステムというのは、難しいとは思いますがね。学際的なテーマが出てくるだろうから。

**宇野**：まず申請書類を科研並みにする。特別研究助成費の申請時期はいま12月でしょ、それは科研の申請時期よりずっと後じゃないですか。科研に申請した人は、特別研究助成費の申請の時は、科研の申請書類そのままと、単年度の特別研究助成の一年しかない分の変更部分をA4に書いて提出という形がいいのではないかと思います。

**緒方**：書式を同じにしとくと、みんな書くからいいじゃないですか。

**西原**：科研の申請書類でいいと思いますよ。大変だけど。

**宇野**：審査員は死んでもらうかしょうがない。

**大津**：科研って何枚あるんですたっけ。

**大森**：十数枚です。

**宇野**：既にその研究課題についての業績がある、つまり準備状況が整っていて、その研究計画によって、こういうアウトプットが予想されるとか、少なくともそこまで書いてないと。

**森田**：いまは単年度だけど、もう少し増やして複数年度の研究助成もいいんじゃないかな。予算は増やされないのでしょうから。今ある予算で形を変えてもいいかもしれませんね。

**宇野**：今、大津所長と僕が審査システムの改革を断行したら、恨まれるでしょうね。今までもらっていたのに、なんで落とされるのかと・・・。そうなるとは思いますが、それがもし出来るのであれば、構わないと思っています。その代わり、入り口と出口の審査は厳しくしていかなくてはならない。また旨みとして、この空間できちんと研究出来るというサポートだとか。要するに、空間の提供です。空間提供されても何にも嬉しくないとは思いますが。

**緒方**：でも場の提供って大事ですよ。集まって、そこで何かできるという。

西原：時間の提供だと思うけどな。

宇野：それが一番ですね。

緒方：時間の提供という意味で、事務的なものは事務の人がしてくれるってことですよ。

宇野：それをここで決められればいいんですけどね。

緒方：審査を厳しくするためには、評価基準を明文化しないといけないでしょうし・・・。

宇野：でも丸々科研費に乗っかっちゃえばいいんですよ。科研費の審査基準は全部HPに載っています。

緒方：全体のテーマについてですが、研究所として、当初「言語」と「仏教」というのが、学部の構成からあらゆる人に理解されたんでしょうけれども、こういう多学科になって、皆が納得できる理念的なことが謳えるかどうか難しいでしょうね。

西原：第二紀要という言葉がさっきから出てきていますが、第二紀要が必要ないのかというと、今の時期、大学評価とか入ってきたときに、書きやすい所を少しでも残しておかなければいけないという、大学全体のことがあって、その受け皿としての機能はあるわけですよ。

宇野：そうですね。当時、図書館長だった川辺先生と研究所長だった高石先生が、『紀要』と『年報』をどう住み分けようかという話をされたみたいです。それによると、『紀要』は個人的な研究成果として単著の論文しか載せないで、共同研究の成果である共著の論文はすべて『年報』に載せて欲しいということのようです。それで『年報』には共著論文だとか講演会記録だとか、単なる私的な個人的な研究でないものも掲載するようになっていきます。

大津：研究者は学会に所属されていると思いますので、非常に専門性に特化したものはどうぞそちらの学会誌へ出して下さいと。それが一番、学会のためにも、本人のレベルアップのためにも、役に立つと。ただ大学の『紀要』あるいは『年報』というものは、大学独自の狙いというものがありますよね。例えば、『年報』にも収録されている、大学が将来過去を振り返った時の資料が残される場にもなるわけです。それをこころばらく宇野先生に探してもらったのですが、ほとんど過去のことかわからないんですよ。ということで数年前から『年報』の中身が少し変わってきたわけです。そういうものの受け皿として機能する部分もあるんですよ。

緒方：例えばどういう？

宇野：研究彙報を『年報』で載せるようになったんですよ。

緒方：最近なんですね。

宇野：これは『年報』に変わってからです。『論叢』の時は彙報ページなど一切なくて、『年報』になってから、その年度に研究所が何をしたのか、どういう研究活動が行われたのか、あるいはどういう研究会を開いたのか、談話会は誰がしゃべったのか、特別研究助成費の採択課題も載るようになりました。

大津：大学は、こういうことを今までやってきたんだという、まさに『年報』ですよ。オフィシャルの。

宇野：この彙報が出たというのは、まさしく『年報』にしか出来ないことなのだけれど、その研究活動の中身が問題です。今後、この中身を研究所がどう作っていくのか、いい感

じの循環にしていきたいと考えています。できれば、研究所が研究資金を出した上で、アウトプットのお願いもする形にしたい。これまでのように、外部の人を呼んできて話しをしてもらい、それをテープ起こしして終わりというものには、もうしたくないのです。もちろん、最初森田先生が言われたように、本学の教員だけで大きなテーマを作って共同研究を出来るかと言えば無理です。そんなに同じような分野の人が集まっている大学じゃないからですね。大森先生なんてはっきり言って孤独の内に住んでいるみたいな感じでしょう。

**大森：**いえいえ、ここに来たときにびっくりしたのは、共著ではない論文がたくさんあったことです。私は卒業してから、共著でない論文を一度も書いた事はありません。それは文系と理系の違いかもしれませんが……。ちょっと話がそれますが、例えば九州大学でやっているのは、医学部の先生とITの先生が研究所みたいな所で、一緒になってインフラは情報の先生がやって、手術している映像は医師が、みたいなコラボレーションする場になったりして。筑女はいろんな先生がいらっしやと思うので、いろんな先生をくっつける場になったりするのかなと思うんですけども。

**宇野：**多分、最初研究所はそういうのを模索していたんでしょうね。だから、当時の公開シンポジウムは学外向けではなく、学内者に限って先生と学生が参加し開催されていました。

**緒方：**談話会？

**宇野：**談話会じゃなく、研究シンポジウムをやっていたんです。その学内でシンポジウムをやるために、準備研究会というもので、昔はやっています。

**緒方：**すごい。狙っていたんでしょうね、コラボみたいなものを。

**宇野：**そう。学内の人間でコラボして、研究の糸口を探すみたいなことを、研究所がやっていたんです。だから殆ど学内で開催していたんですよ。

**緒方：**ああ本当だ。年に2回？

**宇野：**つまり1990年代前半のシンポジウムというものは、学内者がイニシアティブをとって学内で行い、うちの教員が何十人も参加している状況だったと考えられます。それが1990年代後半以降になると、費用が発生する外部（天神や大丸エルガーラ等）での講演となり、有名な先生を呼んできて学外の一般の方を対象にしたものに変化しているのです。つまり、宣伝媒体です。しかし当時は、このようなシンポジウム、講演会事業以外には研究所がお金を持っていなかったことから、当時の先生方が科研費に応募したことがあるようです。その時採択された研究種目が、宗教学の研究です。また、学会から研究資金の助成を受けた例もあります。このように研究資金を確保しなくてはいけないということで、1997年に研究所の研究助成がスタートしています。そして、これが規模拡大されて、大学の方に移管されたようです。

**緒方：**そして、研究所と切り離されてしまったわけですか。

**宇野：**当初の目的にもどって、もう少し研究所らしいシンポジウムを学内で行うとか、そこからコラボができる糸口を探すとか、学際的な研究課題を指定するとか、研究所が主導して研究資金配分を出来たら一番だと思うのですが……。

**緒方：**研究所は『論叢』を発行すること、公開シンポジウムを行うこと、談話会を実施す

ること、この三本柱が中心ですよ。それで、なぜお金だけが大学に行ってしまったのか？ 談話会というのは、本当はコラボの可能性が探れるような・・・。

**宇野**：研究談話会は、短大と大学それぞれの教員が、お互いを知るために始まったものようです。大学が新設された時、在職する教員がどんな研究をしているのか、研究者のお披露目みたいな意味合いで始まったようですね。それでも、当時の研究談話会には、教員が30人くらい聞きに来ていた記録が残っています。それに比べ、最近の研究談話会は少ないですよ。

**大津**：はい、10人くらいでしょうか。

**宇野**：最近では10人を越えることなんてあまりありません。

**緒方**：スタートしたときは意味があったはずですよ。そして、このところ参加者が少ないというのは、参加する必要性がないと思う人が増えているのでしょうか。

**大森**：研究談話会が何をしているのか、よく理解できなかったというのも、あると思います。

**大津**：参加できないというのは、物理的な問題なのでしょうか。例えば、今日のような座談会日程を設定するにしても、非常に厳しい状況なわけですよ。それと同じようなことが、いろいろな催しにも共通して言えると思います。

**宇野**：忙しすぎるんですよ。

## サバティカル

**大津**：例えば、今宇野先生からご提案いただいているのが、研究所のサバティカルです。

**宇野**：要するに、研究所でもっと研究時間を確保する方策はないものかと。今の在外研修というのは、海外に行ったり、国内でも別の機関へ行ったりして全く学校に来ない。それならば、授業を減らして半サバティカルとか、授業を1コマだけにして、後は全部研究するというサバティカルにしたら、今の予算で2人位出来るのではないかと思ったりします。

**緒方**：なるほど・・・でも授業だけといっても、委員会とかいろいろありますからね。

**宇野**：委員会などには出席したらだめですよ。出席していたら腰のすえた研究なんて出来ません。ただ、他の先生に迷惑がかからないよう、卒業ゼミだけはやるとか。

**緒方**：でも、なんかサバティカルって取りにくくないですか。

**宇野**：年功序列のような気がしますよね。

**緒方**：本当はサバティカルないと、きついですよね。みんなサバティカルなくて我慢しているというか、おかしいなとは思っている。だから、今言ったような形にしる、留学とかにしる、サバティカル制度を研究所主体で作りに出していけるのであれば・・・？

**宇野**：研究所主体で制度を作ることができるのであれば、サバティカルの種類をいっぱい作りたいですね。

**緒方**：でもサバティカル制度をつくることは、教務とか他の運営部門と関わることだからなかなか難しいでしょうね。それでも研究所として、強いポリシーを持ち、これはどうしても必要だということを言えるとしたら、教員にとっては有難いですね。

宇野：研究所がサバティカルを選ぶ主体に、もしなつたとするならば、審査等はきっちりしたものにしなないといけないでしょうね。

大森：それは1年間で研究するものなののでしょうか？

宇野：1年間では絶対にできませんね。でも僕ら文系の研究者は、今までやってきたものをギュッと纏めないといけないんです。

大森：纏めるってことには、使えると思うのですが・・・。

宇野：そうですね。1年間だったらそうなります。

大津：あるいはこういう研究のここに特化して・・・というような形なんかもあります。

宇野：森田先生も僕も学位を持っていますが、学位論文を出版していません。なかなか暇がなく、10年以上前に書いた学位論文をそのままにしています。

森田：単著が書けませんよね。

緒方：それが出来るような形に持っていかたいのですが・・・。

森田：サバティカルもね。全面的に授業をしないのではなく、2コマ減らすというルールもあり得るんじゃないかと思います。

宇野：僕も色んな段階付けていいんじゃないかと思います。

森田：つまり、2コマ免除の合計10コマ講義。その代わりに90分×2を研究時間とし、1週間で180分の研究時間が取れたら、かなりいいのではないのでしょうか。

西原：特任教授みたいな感じは難しいのでしょうか。

緒方：委員会などの会議がないとすごい楽ですけどね。

森田：学科の現状としては難しいですね。役職者が全員戻って来てくれたら出来るんだけど、うちの学科は半分役職者に取られているので・・・。

西原：海外に行ってるのならまだしも、通常、会議などの校務なしで、大学内をウロウロしていたりすると、なかなか難しいものがあります。

緒方：やっぱりそれも、組織の事を考えることになっていますよね。

宇野：組織のことを考えるのは、その立場の人をお願いして、研究所は大いに研究のための要望や研究のためにすべきことを発信していかなければならないんです。

大津：それは大学側も待っていると思います。

宇野：とにかく特別研究助成費を研究所が配分し、その審査を厳しくしたり、アウトプットを厳しくしたりする。そのかわりとして、研究のための時間を確保するような研究所サバティカルみたいなものを作る。そして出版助成費を使って、出版する時に思いきりバックアップする。研究成果が研究者へも学校へもメリットがあるようないい循環を作りたいんです。『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所研究叢書シリーズ』というような形で作ればいいなあと考えています。それがまた、研究者と研究所のいい循環にできたらなあと思います。

森田：お金の面は解決するとして、時間の面でハードルが大きいんじゃないかと思うんですよね。

宇野：研究所サバティカルというのが実現できるかどうかは、全くわかりませんよ。

森田：提案としてはすごく魅力的だけれど、全学科関わってくることだから難しいでしょうね。でも、これができたら、かなり画期的なことだと思います。

宇野：これが出来たら私が応募したいです。

緒方：サバティカルについては、非常勤を雇わなければいけなくなりますよね。それは研究所が研究所の予算として数十万円を申請するのですか？

宇野：研究所がやる必要性はないと思います。非常勤の手当は、大学がやればいい。研究所がサバティカルの審査をし、サバティカルに入る人を決め、あとの非常勤手当は現在の在外研修制度と同じように、大学でしょうね。

森田：だから学園判断の部分も多いから難しい部分もあるけれども、やっぱりそれは提案しないと変わっていかない。

宇野：段階を設定して、やっていきたいと考えています。特任サバティカルであれば、非常勤を雇うお金は必要ない。学科内で恨まれるかもしれませんが・・・。

森田：会議に出なくていいっていうのがすごいですよ。

宇野：特任サバティカルの方が、今の在外研修制度よりお金はかかりません。

緒方：それで叢書が出れば、学校にとってはいいですよ。

森田：その分を学科の先生に少し苦勞して貰って。

大森：それが許されるかというのが疑問です。研究しているからという事で許されるかということです。

宇野：それは研究しているという事で、許される雰囲気を作らないといけないのではないのでしょうか。

緒方：どうやって作っていくのですか。研究所が審査することを強く出したら、やっぱり学内での基準としての位置づけになるのではないのでしょうか。

宇野：本当に学術レベルとして、立派なアウトプットが出るというふうに、研究所がバックアップしておかないといけない。そうしたら、研究をおろそかにしている場合には、サバティカルがとれないということです。

緒方：そうしておかないと、恨まれるとかありますよね。

宇野：例えば1年間サバティカルをやって、何のアウトプットもなければ、それは白い眼で見られます。もしそんなふうにアウトプットが出なかったら、その人が次回申請してきたって選ばないようにすればいいだけの話です。

緒方：でも私は教授会に出ていて、教育が大事ですからということをいつも言われているような気がします。学内では、研究という部分を曖昧にしているような空気はありませんか。

大津：大学において教育をする場合、その人の力量というものがないといけないわけでしょう。それは教授法とともに、やはり研究によって、その人が自分を高めたその部分がないと教育出来ないような気がするんです。ですから大学教員というのは、やはり研究者であり、教育者の両方でなければならない。また教育者であるためには、研究をきちんとしておかなければならないと思うんです。極端なことを言えば、大学の教員には、研究を義務付けるべきです。そして、それを開示していくべきではないのでしょうか。これはストレスになりますけどね。

森田：認証評価の話が出ていますが、教員の業績をアウトプットしろ（インターネット等で公開しろ）という方向になると思いますね。これはかなり強く言われたみたいですから。

**大津**：われわれ教員というのは、まず研究者という基礎がないなら、何も出来上がらない気がするんですが、どうでしょう。

**宇野**：教育というのは、手をかければかけるほどうまくいく、手をかければかけるほど学生が育ったりする。それはものすごく見えやすいから面白いことは面白い。しかし面白い反面、僕は100%丸々をそこに注ぎこめない。それは誰にでもできる事だと思う。でも、僕にしかできない研究がある。それがないと僕は大学の先生ではないと思う。高校の先生とか中学の先生だったら100%注ぎ込む先生が一番いい先生だと思う。でも、大学の先生がそれでいいというのだったら、別に僕でなくても構わない。誰かを宇野の代わりとして入れればいいだけでしょう。でも大学の先生というポジションにいるということは、あなたじゃなきゃだめなんだ。それがどこではっきり分かるかといったら、研究でしょう。

**大津**：例えば教員を募集するときにこういう専門の方、と言って募集しますよね。そしてあなたの専門というのは何によって保障され、客観性があるんですかといった場合は、研究業績だと思うんですよね。それは高校の先生等の教員採用とはまた違う気がする。大学の先生というのはこういう専門領域の先生を探します、と、その部分が大学に入った後ちゃんと保障されておかないといけない訳ですから、それはやっぱり研究によって保障すると。ただその時のレベルじゃいけない、アップしていかないといけない訳ですからね。そういう意味で研究所としてももう少し先生方をプッシュすることは出来ないのかなと・・・。

## 研究支援体制

**宇野**：さっき森田先生と、科学研究費補助金の申請を強制できるかどうかという話を個人的にしておりましたが・・・。

**緒方**：強制になっている大学ありますよね。してもいいんじゃないでしょうか。

**森田**：僕はするべきだと思います。研究するかしないかは、その人に任されているのであって、他からやりなさいと言われるものでもなくてそれが当たり前なんだから。僕はマストだと思う。

**宇野**：国立でマストにしているところはありますよね。

**緒方**：していいんじゃないですか。したら当たるようになったという話もあります。

**大森**：僕は出して当然だと思っています。

**宇野**：出すのが当然だと思う先生が増えればいいんですけども。

**大森**：オブリゲーションじゃないのかなと思いますけど。

**宇野**：研究者としてはオブリゲーションに近いと思います。

**大森**：ただ自分が研究しなかったとしても、出した数によって当たるという噂もあるじゃないですか。どれくらい出しているかということによって、研究に対してこの大学は何にどれくらいコミットしているかという評価にもなる。

**緒方**：それ、言われますよね。

**大森**：もちろん個人の問題ではなくて、そうするのが当たり前の人しかいないよねというか、そんな雰囲気になれば・・・。

**緒方**：だけど現実当たり前じゃない訳だから。

**森田**：出してるか出してないかというより、今よくわからないうちに募集があつてよくわからないうちに締め切られているという状態です。さっきも科研の説明会について聞いたんですけども、大学のシステムとして科研に挑戦するということのある程度義務化するわけじゃないんだけどサポートする、見える形にしていくという事務のシステムも必要なんじゃないでしょうか。

**大津**：少なくとも先生方に、ここの研究所のメンバーになることに手を挙げてもらう。そして手を挙げられた先生方には、そのような義務が生じて、義務とともに旨みが保障されているということですね。

**森田**：さきほど話しがあったように、特別研究助成費の研究計画書を提出する時、科研も一緒に申請してもらおう。そして科研が採択されたら研究所の特別研究助成費は取り下げというようなシステムがいい。

**宇野**：科研申請も含めて、研究者としての義務を果たすことは求めても良いと思います。ただし、オブリゲーションと旨味をうまく連動したい。

**大津**：時間とお金の部分と思うんですけども。

**緒方**：時間の問題が一番でしょうね。

**宇野**：うちの教員が、一番悩んでいるのは時間だと思います。

**緒方**：本当にさっきの案は、みんな飛び付きますよね。もし本当に、研究所付きの研究員とかが機能するようになったら夢のようでしょうね。

**宇野**：研究所サバティカルは、ここで勉強してくれればいいですよ。委員会と教授会はすべてパス。特任サバティカルも同じでここで勉強して、その成果のアウトプットを目指す、そんな感じですかね。アウトプットを厳しくするというより、研究成果としてアウトプットを出せるんだという旨味にすればいいわけでしょう。そのためにはやっぱり学術出版助成費も研究所の助成事業でないといけないですね。今は、科研の出版助成は半額で、厳しいですよ。もし300万円なら150万円持ちだしになります。研究所が学術出版助成費を配分するのであれば満額出したって構わないと思うんです。つまり結果をアウトプットする際に、「研究所研究叢書シリーズ」として出版を全面的にバックアップすると。

**緒方**：今のその夢のような仕組みは、事務方にどれだけ理解してもらえるか……。お金のこととか、いろいろ相談したりしないといけないですよ。研究所関係の仕事が中心になるような方を連れてこれるかということですが……。

**宇野**：難しいとは思いますが。

**緒方**：仕事の内容をきちんと伝えて、責任持って取り組んでくれる人をどうやって捻出してくるかでしょうね。今も科研費とかを管理している「研究支援センター」というのがあるじゃないですか。

**大森**：えっ？そんな組織あるんですか？

**緒方**：あるですよ。

**大森**：え、どこにですか。全然助けてもらってない。

**緒方**：庶務課内に新しくできたセンターなんです。本当は、申請書を書くのを助けたり、外部の公的研究費の紹介をしたり、教員間の繋ぎをしてもらえるといいのですが。



大森：科研費だけしか想定してないですよ。

宇野：例えば、科研費を大量に取っている大学は、研究支援センターのようなものを作っていて、そこで何をするかといったら、科研費などの外部資金の管理、つまりお金の面だけではないです。採択されるように、教員に申請書の書き方を教えたりすることだってあります。事務職員がですよ。

緒方：でも今は、学内と学外の研究支援を分けて考えているけれども、本当は一緒に考えた方が展開性もあるはずですよ。

宇野：例えばサバティカルもそうですよね。私学共済が助成金を出していますが、それで行くと4月1日にパスポートにハンコが押され、翌年3月31日に押されていなければ駄目だというような、きつい縛りがあります。でも、結構な金額を助成してもらえますので、学内の制度と連動できればいいのですよね。

緒方：うちに足りないのは、学内学外の連携なんですよ。

宇野：科研の場合は、科研だけで完結してないといけないから、合わせ技での使用は無理ですけどね。

緒方：研究支援ということで広げていくというか、組織的なものとして固めていくように、スタートとしては今回の提案なら相当いいなあと思います。

宇野：希望としては、研究所に常駐している研究支援のための事務の方が欲しい。

大津：専任の事務の方は、研究員と事務の間みたいな存在というんですかね、PDのような。そんな人がいれば・・・。

宇野：研究助教みたいな人を研究所に置いて、そこである程度の研究支援をやっていたら理想的ですね。

大津：以前に宇野先生の方からお聞きしたように覚えています、大谷大学ではそのような研究員がいるとおっしゃっていました。

宇野：真宗総合研究所の仕組みを知りあいから教えてもらったのですが、研究補助員という身分の人が研究課題ごとにいるようです。一つの指定研究課題に対し約1000万円、合計5つくらい、その5つに研究補助員としてPDや大学院生を月8万円で雇っているんです。そのような研究補助員が各研究課題に2～3人ずついるという形になっています。そういう人達が、昔の研究助手みたいな形で、一つ一つの研究課題の中で働いているという形になっているんでしょうね。

緒方：研究所に掛けるお金が全然違いますね。学内での位置づけが違うと思います。

宇野：まあ大学自体の規模が全く違いますからね。

## 研究成果のアピール

西原：研究所のレベルアップをするということで、大学にとって何のメリットになるかということまでこちらで考えて提案しないと、研究資金だけを研究所で取り扱うということは難しいでしょう。また、研究所で研究叢書を出版すると、大学全体の宣伝になると言わないと学園側でも受け入れられないでしょうね。

**森田**：大学院教育と少しリンクしてみてもいいのでは？今、うちの大学の大学院教育は難しいんですけども、研究テーマと合うような研究生制度を設けて、ここに登録する形で研究のサポートをしていく。

**宇野**：今研究所では、登録制の仏教研修生制度を設けています。研究についてどれだけ学生と一緒に出来るかというのは未知数ですが、ある程度双方のメリットがあるようなものを作っていきたいと考えています。研究所の研修生として大学院生にも登録してもらって、一緒にやれる、修士論文も書ける、そういったメリットがあるような形で、この場所を使っていければいいと考えています。

**森田**：マスターからドクターに上がる1年間、ここの研究生にしておいて、他大学へ出ていく時一応履歴書に書ける形にしておけば、将来的には本人の財産になると思うんですよね。その代わりに、研究のサポートをしてもらい、学校としてはアルバイト代も出す。双方でメリットがあるのではないのでしょうか？

**緒方**：さっきおっしゃったように、研究所の活動に研究資金を出すことが、学園にとってどんなメリットになるかということ、理解していただかないといけないんですよね。要するに、研究成果の見せ方ですね。

**森田**：うちの研究所は本を多く抱えているわけじゃなければ、資料を持っているわけじゃない。人間を抱えているんですよね。それをどう使うかということだと思うんです。通常の場合多くの蔵書や寄贈図書があって、特定の分野に関する研究所があったりするんですけども、うちの場合は人材しかいない。どういう風に利用してどう見せるかということなんですよ。人間の数は限られていて、研究のテーマも限られています。それをどう組み合わせ、どう活用するかという事だと思います。だから、いきなり大きな研究資金を下さいといってもできるものではないでしょう。出来ることといえば、うまく研究していくシステムを作っていくという事ではないでしょうか。

**大津**：そこが研究者が一番、苦手とするところなんですよ。当局に対する訴え方というのが。それは研究とは対極にあるような気がします。非常に具体性がないと納得して貰えない。

**緒方**：誰かがノーベル賞を取るとかね。

**宇野**：それは解りやすい。(笑)

**大森**：それは事務方の仕事だと思うんですよ。広報するとかね。

**緒方**：でも研究を広報してくれる人が、この学校にはいませんから・・・。

**大津**：ニワトリが先か卵が先かになってくるんですよ。そうすると。

**宇野**：でも少しずつ、外にも研究所が研究しているんだということをアピールできれば・・・。

**森田**：初期のころはそれがシンポジウムだったと思われれます。途中で公開講演会になったのは、当時のアウトプットで、一生懸命考えた外向けの形だったのではないのでしょうか。今はそれも無くなり、衰退してしまっているというのが現状で、それを、どうしていくかということですよ。

**緒方**：宣伝というのが大切にいろいろやっているみたいですけども、宣伝の仕方はこの20年間で変わっていいわけですよ。効果的なアウトプットの仕方を、叢書という形で出したらいいのではないのでしょうか。

**宇野**：僕は叢書という形で、きっちりした研究をシリーズでコンスタントに出していける形を作りたいと思っています。そうでないと、意味があった公開講演会も、何も残っていない。それが一番悲しいところです。せっかくお金とエネルギーを掛けてやったにもかかわらず、その時だけのイベントで蒸発してしまうのはさみしすぎます。今後は研究所が中心となり、大学名の入った叢書や選書が並ぶような状況を作っていきたいと思っています。

**森田**：たとえば研究レベルアップとして、研究員登録を研究助成の前提にするというのはどうでしょう。研究に関する具体的な研究計画書類を提出してもらい、登録している人だけが研究助成を受ける。お金をもらった研究者は、きちんとアウトプットするという相互監視のシステムを作り、研究のレベルを上げていく。

**宇野**：特別研究助成の審査書類にしても、みんなの目に触れるというのは、刺激にもなると思います。しっかり研究すればそれなりにもらえるお金があるというのは、研究者にとっていい刺激になる。

**森田**：そしてレベルも上がっていき、学内でそう思ってもらえればいい。

**大津**：ここ数年、研究所も名称が変わったり、高石先生によって方向性が付けられたり、23年度の改組に向けていろいろ具体化しなければいけない時期にあると思うんですよ。極端に言い方すれば今がチャンスかもしれません。今年度はおおいに発言して一つでも具体化していかないと、この機を逸するとかなり難しくなるような気がします。今日先生方に発言していただいたことを具体的に提示し、これから前向きに動いていかないといけない気がします。

**森田**：研究向上のための提案というのは、研究所の側から大津先生を通じて上層部へ持って行かないと何も変わらない状況ですよ。今回のことで出てきた課題を整理していただいて、上層部に持って行けるものは持って行って、うまく改革できるところからやっつけて欲しいですね。ドラスティックに何か変わるといことはまずあり得ませんが、こちらの側から提案していくというのが必要だと思います。

**大津**：とにかく上層部に持って行かなくてはいけませんから、どういう形で持っていくかという部分で作戦を練らなければいけませんね。

## ネット利用による研究活動の可視化

**西原**：今度の改組で人間科学部が出来たら、今まで通り単著は『紀要』と共著は『年報』の分け方では無理だと思うんですよ。だから福祉系とか心理系とか、共同研究とか、ここは独自のこういうものというカラーを練って上層部に上げないと、逆に言うと尻つぼみになってしまう。もう一つは、いろんなところから出てくるお金をインターネットでアップして貰って、こんなものがあるんだと認識させる。そうすることで、研究資金を獲得しなければ・・・研究にはお金が必要なんだという思いになってきます。支援センターがあるから、そのくらいは無料でできるでしょう。

**森田**：うちの研究者はこういう研究費を獲得してます、こういう研究を進めます等、イ

インターネットにアップしてもらってもいいんじゃないでしょうか。

**西原**：今年度の科研費は申請者も多かったし採択者も多かったと、学長が教授会でおっしゃっていました。そういうことをインターネットに掲載すると、他の研究者も刺激を受けるのではないのでしょうか。

**緒方**：可視化ですよ。

**森田**：共同研究とかしてたら、堂々とインターネットでアップすればいいんですよ。

**緒方**：それは研究支援センターの仕事ですよ。

**森田**：それは将来的には、人間文化研究所が窓口になってもいいとは思いますが。なんらかの形でアップして、研究所の研究員はこんな業績を上げている、こんな研究を進めている、そういう宣伝に使ってもいいと思います。研究所の研究員として、ホームページでその人の研究が外から見えるという形。研究者が自分の研究を外にアピールできるのは、メリットでしょう。

**宇野**：それは我々に研究の緊張感を与えると共に、メリットでしょうね。また、別のメリットとしては、研究所が、先生方にこういう研究資金があるんだとか、こういう風に外部資金を導入している先生がいらっしゃるんだとかのことを研究所からアピールしたって構わないですね。今は誰が科研を取っているのかということも普通にはわからない。調べないとわからない、関心も持っていない。今どんな外部資金があるのかも気にしていない。結局意識している人間だけが意識していますよね。僕は、民間の研究助成は、『助成金応募ガイド』をこれいいなあとか思ってながめてます。

**大森**：自分がよくやるのは、他の大学の研究所のページをみて、これだと思ったりしていますけど・・・。

**宇野**：他大学の研究所は、事務方がいて外部の研究助成とかをホームページにきっちりまとめて載せてみたり、教学課題に合うような外部資金の情報収集等をしているんですね。

**大津**：本学のホームページの中には研究所のページはありませんよね。やっぱり組織として、研究所という部分をクリックすると、大学がやっている指定研究とか、共同研究、個人研究なんか、わかるようになっていけるべき。

**西原**：それは絶対いいと思いますけどね。

**大津**：今は学内の教員限定のページをクリックすると、研究所というのが出て、『年報』の締切がいつまでですよとか、情報が出るだけで、外に向けた情報が一切ありませんよね。

**宇野**：だから『年報』を公開するところもない。『紀要』の方は図書館がやってるから、図書館 HP で見れますよね。

**緒方**：外から見えない活動をしているというのは不思議です。もったいないですよ。

**宇野**：何か動こうとしても、結局所長と主任の仕事が増えるだけの状況なので、少しずつしかできません。

**大森**：とりあえず、庶務課の誰か、研究支援センターの誰かを一人とってくるみたいなの。

**宇野**：でも、こういう風にしたいということ言って、どれくらいの支援体制ができるかでしょうね。しかし、このネットで我々の研究が可視化されるというのは、縛りでもありメリットでもありますね。もっと研究所がネットを利用する形にしていきたいです。

申し訳ありませんが、時間となりました。司会が能力不足で、話しが纏まらず申し訳あ

りません。また、個人的にでも研究所に対するご意見ご希望がございましたら、研究所の方までお知らせいただければ幸いです。それから今年度は研究所改革のプロジェクトチームを作ろうと思っております。それで少なくとも24年度からの改革を目指しております。今日先生方から頂いたアイデアを十分に活かして、より良い研究所にしたいと考えております。本日は本当にありがとうございました。



(平成 22 年 5 月 6 日 (木) 於 人間文化研究所)